発表要旨集

Abstracts

1. 山口 周子（（公財）中村元東方研究所専任研究員）

悪女マーガンディヤーの物語

—Udenavatthu（ウデーナ王物語）とその関連話をめぐって—

Dhammapadāṭṭhakathā（『ダンマパダ解説』 以下 DhpA）中の Udenavatthu（「ウデーナ王物語」）に記載されている Māgandiyāvatthu（「マーガンディヤー物語」）および Sāmāvatiyā Māgandiyāya ca maraṇaparidīpika（サーマーヴァティーとマーガンディヤーの死に関する詳説）と、その関連テキストを比較する。この二つの小話は連続したもので、美貌のバラモン女マーガンディヤーがブッダに敵意を抱くようになった経緯や、彼女が、夫ウデーナ王のもう一人の妃、サーマーヴァティーを謀殺し、後にその罪を暴かれ、処刑されるまでを語る。

関連テキストとしては、同じく DhpA 内にある Māgandiyavatthu、*Suttanipāta*、『仏説義足経』、『優填王経』、『根本説一切有部毘奈耶』（漢・蔵・蒙訳）などにある偈頌や物語が挙げられる。なお、これらの関連テキストは Udenavatthu 中の二小話全般にわたって重複するものではなく、いわば「部分一致」に留まるものが多い。また、物語の趣旨にも差異がみられるため、Udenavatthu そのものの成立過程について考察する一助となるだけでなく、仏教説話の変遷をみる上でも興味深い事例となり得る。

2. 清水 洋平（大谷大学・非常勤講師）

大谷大学が所蔵するタイ王室寄贈パーリ語貝葉写本の来歴について

大谷大学には、百年余り前にタイ(シャム)王室から寄贈されたとされるパーリ語貝葉写本 64 套（「大谷貝葉」）が所蔵されている。パーリ語貝葉写本の集成としては国内で最大級である。

本発表では、この「大谷貝葉」の来歴について、明治 33 年（1900 年）「仏舎利奉迎」の際にシャム王室から寄贈とされる従来説を、19 世紀末に活発化した日本人留学僧の動向を交えて再検討し、来歴への新たな説を提示する。

3. 平木 光二（近畿大学講師・東方学院講師）

ミャンマーのムスリムと仏教徒の民族・宗教間衝突

平穏な仏教徒の国の印象が強いミャンマーだが、テインセイン新政権が発足した 2011 年以降、言論等の規制が緩やかになった結果、比丘のなかには鉱山労働者の争議を支援したり、ムスリムをヘイトスピーチで激しく攻撃し国民を扇動するヴィーラトゥー比丘のごとき僧までが出現するにいたった。

本発表では、今日深刻な国際問題になっているミャンマーのムスリムとビルマ仏教徒間の対立（ないし融和）の問題を考えるにあたり、この数十年の間にミャンマーの国内外で起こった事件、事象とそれに関わる言説等を紹介することを目的とする。

4. 伊藤 千賀子（早稲田大学非常勤講師）

Jātaka 73 Saccaṃkira-jātaka の変容と広がり

Jātaka 73 に描かれるヘビとネズミとオウムの報恩説話は、中国の『六度集経』に収集された時点で洪水説話となり、様々なモチーフが導入され、大きく変容している。日本には『今昔物語集』に『六度集経』そのままの形で伝わっている。また、韓国では「モクトリョン（木道令）」という人類創世神話にとりいれられており、多様なヴァリエーションをもち、童話化もされて広く流布している。これらの変容とその背景について明らかにしていく。

5. 天野 信（龍谷大学非常勤講師）

二帰依の商人と燃燈仏授記

釈尊の成道後まもなくして、釈尊と対面した二人の商人が、仏と法に帰依し（二帰依）、仏教史上、最初の在家信者（優婆塞）となったエピソードは、パーリ律をはじめ、各部派の文献に伝承されている。

一方、燃燈仏授記とは、過去世において、釈尊が将来の成仏確定を過去仏である燃燈仏によって告げられるといった内容のエピソードである。燃燈仏授記は、ジャータカ註であるニダーナカターがそうであるように、仏伝テキストの冒頭におかれる場合が多い。

上記二つのエピソードは、一見、関連性がないように思えるのだが、『四分律』や『仏本行集経』では、この二つは接合され、一つのエピソードとして伝承されている。また玄奘の『大唐西域記』にも、二つのエピソードの親密性を示唆する報告内容が存在する。

本発表では、この伝承形態に着目し、燃燈仏授記が仏伝テキストの一事蹟として確立される過程で、二帰依の商人のエピソードが重要な意味をもつものであることを指摘する。

6. 岡本 健資（龍谷大学政策学部准教授）

Dhammapada-Aṭṭhakathā における舎衛城神変について

釈尊が異教徒と神力を競うという「舎衛城神変」は、『義足経』をはじめ多くの文献資料に内包され、また、美術資料にも作例が複数存在する点で、釈尊の伝記の中で有名な話の一つとして知られる。さらに、幾つかの文献では、この話は、超自然的な力に対する仏教の立場を示すという役割をも担っている。本発表では、*Dhammapada-Aṭṭhakathā* に含まれる「舎衛城神変」を検討し、他の文献に含まれる話と比較することで、相互の関係を探る。